様式３

全教科についての指導方法の課題分析と具体的な授業改善策

教科名	国語科

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善策	補充的・発展的な学習指導計画
第１学年	・日々の音読や発問により、正しく文を読めるようになってきている。 ・他の教科・領域でも読む力を身に付けさせる指導が必要である。 ・新出文字では、促音や濁音などの定着を促すために練習方法を工夫する必要がある。	・音読では、リズムに合わせる，人数を変える、役割読みをさせるなど様々な読み方を多く取り入れる。 ・動作化や役割演技など、様々な読みをすることで、読みを深められるようにする。 ・指書き⇒なぞり書き⇒写し書きの習慣を徹底し，着実な習得を図る。	・定期的に文字の理解や定着の度合いを評価し、個々の到達度を確認しながら指導していく。 ・本の読み聞かせなど読書に親しめる時間を多くもつようにする。 ・文字の正しい定着を図るため、字形や書き順も含め、反復練習をする。
第２学年	・児童が意欲をもって音読できるよう工夫をする必要がある。 ・自分の考えを順序立てて話すことや、話を正確に聞くことに課題のある児童が多くいる。 ・新出漢字が増えたため、定着には個人差が見られる。	・音読の練習方法に変化をつけたり、家庭でも練習しやすいカードを準備したりするなどする。 ・「話し方名人」、「聞き方名人」や「声のものさし」を活用し、日常的に確認する。 ・話すだけでなく、板書にも話すことを書いて提示し、視覚的に分かりやすくする。 ・クラスやグループによる話合いやスピーチを行い、感想を交換したり質問したりする機会を設ける。	・日常的に読書ができるような環境を整え、本に親しみながら読解力を高める。 ・漢字を確実に定着させるため、反復練習をする。 ・日常的に文を書く活動を積み上げ、表現力の向上を目指す。 ・スピーチでも、「はじめ、中、終わり」を意識して話すよう指導する。
第３学年	・音読の技能を高めていく必要がある。 ・物語文や説明文では、言葉の意味や語尾を正確に捉えて読み取っていけるようにしたい。 ・話す力や書く力には個人差があり、全体的に力を高めていく必要がある。 ・漢字や文字を書く能力にも差が出てきている。正確に丁寧に書くための個別指導が必要である。	・音読を楽しめるように工夫をする。 ・読解ではサイドラインを引くなど、叙述に即して正確に読み取っていくような指導の工夫を継続していく。 ・書く活動に継続して取り組み、児童一人一人が書き方を理解するようにしていく。 ・漢字の学習の流れを身に付けさせ、児童が主体的に覚えるようにする。	・「読み」の力を高めるために、音読活動を多く取り入れていく。 ・日記、読書感想文、作文などで自分の考えや気持ちを書く機会を設定し、作文に対する抵抗感をなくしていくよう指導を工夫する。 ・全文を横断的に、読み取っていけるような発問の工夫をしていく。
第４学年	・叙述に沿って読み取ることができる児童が多いが、さらに読み深められるような指導法を工夫していきたい。 ・漢字や音読などは、全体で繰り返し学習に取り組みさせながら、平行して個別指導をしていく必要がある。 ・話す力、書く力をはじめとした表現力を高めるために、話したり書いたりする機会を多く設ける必要がある。	・個人読みの後に少人数での意見交流の場を設定し、どの児童も発表しやすい環境をつくる。また、口頭発表、動作化、劇化、朗読、群読など、様々な発表方法を取り入れながら、文や言葉を正確に読む力を付けさせる。 ・漢字学習の流れを確立し、学習しやすくする。 ・文章を書く過程を理解する指導を行い、書く活動を充実させる。	・スピーチなどに継続的に取り組ませ、自分の考えや気持ちを表現する力を高める。 ・毎週、短時間で書く活動を行い、書くことを習慣化させる。 ・授業の終わりには学習感想を書くなど、書く活動を多く取り入れことにより、日常的に書くことに親しませる。
第５学年	・音読に意欲的に取り組むが、主題を意識し、読み深める力が十分ではない。 ・自分の考えを言葉や文章で表現することにも個人差があり、個別の指導が必要な場面が多い。基本的な言葉の使い方や語彙を再確認し、定着させる指導の工夫が必要である。 ・相手意識をもって文字を丁寧に書くことを意識させる必要がある。	・文章や言葉に着目して読む力を向上させる。 ・めあてを明確に提示し、文章などから内容を丁寧に読み取らせ、中心的な情報と付加的な情報に分けさせたり、取り出させたりするなどの指導の充実を図る。 ・事実と感想や意見を区別して文章化できるよう、文章表現過程に沿った活動を吟味して課題提示を行い、指導・支援に当たる。	・新聞記事に対する自分の意見を日直のスピーチで話す機会を設け、表現する力を高める。 ・本の紹介などを通してより良い読書環境を整えていく。 ・学習した漢字や言葉を使う場面を増やした学習指導計画を立てる。
第６学年	・物語や説明文を読み取ったり、言語を正しく使ったりする国語へ対する意欲はある。 ・作品を比べて読んだり、読み取ったことをもとに自分の考えを表現したりすることに対して、昨年度より抵抗が少なくなってきた。今後より一層高めるためには、表現するための技術を教え、表現する場を充実させる必要がある。	・話合い活動やスピーチなど、表現できる場を意図的に設ける。話形を示すことで、表現力を伸ばす。 ・読書の質を高め、意欲的な作文活動になるような題材の工夫、モデル文の提示、文章構成指導の重点化を図る。 ・漢字書き取り学習に引き続き重点をおき指導する。	・１０分作文など作文指導に重点をおき、題材の工夫、書くための見通しをもてる工夫をして指導計画を立てる。書くことを充実させる。 ・表現するための型を示し、補充的に活用し、習慣化させる。話合い活動では意図を明確にし、聞き合えるように学習計画を立てる。

教科名	社会科

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善策	補充的・発展的な学習指導計画
第３学年	・体験的な学習の中から、課題を見付けたり調べたりできるような学習をしているが、自ら課題を見つけられない児童や意欲がもてない児童がいる。 ・自分たちで調べたり、自ら課題を見付け解決したりすることができるように学習方法を身に付けさせていくようにした。	・課題のもち方、調べ方、発表の仕方の指導を具体的に示していく。 ・同じ課題をもつ児童同士のグループ活動を取り入れることにより学習意欲を高める。 ・自分達で調べたい施設や内容を地域と連携しながら、自分たちで考えた方法で調べ、まとめていくことで、意欲を高めるとともに、社会的な見方・考え方を身に付けさせていく。	・総合的な学習の時間と複合的に扱い、課題解決の仕方を指導していく。 ・児童が発表し合う機会を設ける。 ・異学年や地域、家族に調べた内容を発表したり、地域の方へインタビューやアンケート等をして調べたりし、身の周りの社会の状況に目を向けさせていく。
第４学年	・身近な生活の問題に目を向け、そこから課題を見付けたり、必要な資料を使って調べたりする学習に取り組んでいる。 ・資料から必要な情報を集めたり、正確に読み取ったりできない児童がいる。 ・図表や地図、統計や年表などを活用する技能を高める必要がある。	・課題を見付ける手だてとして、体験学習を多く取り入れ、興味関心をもたせる。 ・生活体験や授業で見学、体験したことを丁寧に振り返りながら、資料と関連付けて考える力を身に付けさせる。 ・グループ学習を取り入れ、お互いに話し合いながら、課題解決ができるように学習形態を考えていく。	・課題を見付け、グループで協力し合って調べたり、まとめたりすることで、見逃していた点を互いに気付き、補完できるようにする。 ・拡大した資料などで、資料の読み取り方を指導する。 ・社会科だけではなく、総合的な学習の時間の学習内容やその他の教科と関連させて指導していく。
第５学年	・基本的な知識を身に付ける指導の工夫が必要である。 ・課題解決のために必要な資料の集め方や各種の基礎的資料の読み取り方を身に付けさせたい。 ・資料から社会的事象を見付けられるが、自主的に調べたり、課題に対する考えを導き出したりする学習意欲をもたせたい。	・クイズやゲーム形式の問題を通して、基本的な知識を定着させる場面をつくる。 ・つかむ過程で児童の生活と密着した学習問題を立てさせるとともに、調べる過程で発表会を行い、児童相互で学び合える場面を設定する。 ・学習意欲を高めるために、児童の興味、関心をひくような授業の導入を工夫する。	・資料の読み取りが不十分な児童への個別指導を行う。 ・調べ学習において、児童の課題に応じた調べ方や必要な資料の探し方を助言するとともに、課題を児童の興味関心に応じて設定する。 ・絵や図を用いて視覚的に分かりやすいノート作りを推奨する。
第６学年	・歴史的事象に対する興味・関心が高く、偉人の功績などについて適切に資料を用いて調べられる児童が多い。しかし、人物と功績とが合致しなかったり、時代背景の推移や歴史の流れを捉えづらかったりするなど、知識・理解十分でない児童がいる。以上の実態から知識を定着させる指導、思考力を高める指導を工夫することが必要である。	・授業の中で知識を定着させる場面を設定する。 （フラッシュカード等） ・資料を活用して時代背景や人々の暮らしを十分に想像させる。 ・学習形態（個人で、グループで）に変化をもたせたり、発表方法を工夫したりして、学び合う場面を意図的に設定する。	・資料が見付けられない児童には、どの資料を用いて考えればよいかを示し、読み取る時間を確保する。 ・調べたことを箇条書きで抽出するだけでなく、内容を読み取ったことから大切な部分を抽出できるようにする。また、絵や図を用いて視覚的に分かりやすいノート作りを推奨する。

教科名	算数科

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善策	補充的・発展的な学習指導計画
第１学年	・数の認識に個人差があり、一斉指導では、理解するのが難しい児童がいる。個別指導だと時間はかかるが理解できる。 ・計算力は差が大きく、毎日の繰り返し練習が必要である。	・学力の差に対応した習熟度別少人数指導と個に応じた指導を行う。 ・具体物を操作することで、数量に対する感覚を磨いていけるよう、教材を工夫する。 ・計算カードに取り組む時間を設ける。 ・個別対応の場を増やし、理解が確実に深められるようにする。	・正確な演算力を身に付けさせるため、具体物操作、反復練習を重視する。 ・理解に時間がかかる児童には、個別に課題を与えて理解力の向上を図る。
第２学年	・学力に個人差があり一斉指導形態では理解しきれない児童がいるため、個別対応が必要である。 ・長さやかさ、時刻と時間の学習内容を定着させるのに時間がかかる児童が多い。	・学力の差に対応した習熟度別少人数指導と個に応じた指導を行う。 ・個別対応の場を増やし、理解が確実に深められるようにする。 ・具体物を提示するなどして、算数的活動の経験を増やしていく。	・課題を児童の学力に応じて変えていく必要がある。 ・基礎的な問題の反復練習を計画的に取り入れる。 ・個に応じて発展的な問題を用意する。 ・地域未来塾と連携して放課後に補習を行う。
第３学年	・意欲的に学習し、発表や説明にも積極的で、考えを深めあうことができる。 ・学力の差に対応した習熟度別少人数指導や個に応じた指導を行ったことが有効だった。 ・授業内で補充問題を解く時間を設定し、個別指導している。	・操作活動を通して理解を進めるようにする。 ・既習学習を意識して考える授業を行う。 ・習熟度別の指導を充実させ、算数が楽しいと感じられる展開を工夫していく。 ・繰り返し計算練習をさせる。	・児童の学力に応じて学習課題を工夫していく。 ・算数少人数担当と連携し、休み時間等に補習を行う。 ・地域未来塾と連携して放課後に補習を行う。
第４学年	・学力に個人差があり、習熟度別学級編制をしているが、全体の人数が多いため、理解するまでに時間を要する児童への時間の確保が不十分になるときがある。 ・計算領域や図形領域において、方法は会得していても、仕組みを理解していない場合があり、誤答を修正するのに時間がかかるときがある。	・児童の実態や単元に応じて、習熟度別学級編成の方法を工夫する。 ・実態把握を継続的に行い、それに基づいて支援の仕方を工夫する。また、より実態に即した学習展開を工夫していく。 ・具体的に操作できるような教材教具を工夫し、授業を組み立てる。 ・指導と評価の一体化を目指した授業を工夫していく。	・学習課題を各グループの児童の実態に応じて変える。また、個人の理解度に合わせた課題を提供する場面を設ける。 ・生活と関連づけて理解を深めるようにする。 ・地域未来塾での個別指導は技能の向上に有効だった。
第５学年	・授業に積極的に取り組み、単元直後の定着率はよいが、過去の学習内容を忘れている場合がある。 ・能力の個人差があり、問題解決場面での交流が不十分になりがちである。	・学習内容の定着を図るために、視覚に訴える教材、教具を工夫したり、操作活動を取り入れたりしていく。 ・習熟度別学級を効果的に編成し、一人一人への対応をより深めていく。 ・授業の中で問題練習を着実に行うようにする。	・個人の理解度に合わせた課題を提供する場面を多くし、一人一人が意欲をもって取り組めるようにする。 ・理解に時間がかかる児童には、個別に課題を与えて理解力の向上を図る。 ・必要に応じて放課後に短時間の補習を行う。
第６学年	・意欲的に問題に取り組むため、練習問題や補充問題を授業で多く行った結果、全体的に学力は上がってきている。 ・習熟度別指導を活用して、個々の児童の学力に合った授業を展開している。	・問題解決するために必要な公式などを理解する段階で、考え方に重点をおく課題設定をする。 ・学習形態（ペアやグループ）に変化をもたせたり、発表方法を工夫したりして、自分の考えを説明する場面を意図的に設定する。 ・単元学習の時間を必要十分に調整していく。	・個人の習熟度に合わせた課題を提供する場面を多くする。 ・発展的な課題として、学習内容を活用した問題づくりを設定し、交流活動を活性化する。 ・補充コースで学習する人数を少なくし、一人当たりの個別指導の時間を十分確保できるようにする。

教科名	理科

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善策	補充的・発展的な学習指導計画
第３学年	・植物や昆虫などの栽培飼育や観察学習に興味関心はあるが、継続的に取り組むことが時間的に難しい。 ・身近な自然の事物、現象を体験的な学習の中から学ばせた。 ・自ら課題を見付け、自らの力で調べることができない児童が少なくない。	・興味が持続するような飼育、栽培環境を整える。 ・観察についての技能が高められる方法を具体的に示していく。（観点、数字化、図の描き方など） ・実際の観察や実験を通して、学習する内容を発見したり考えたりできる学習方法を取り入れていく。 ・日常の中で栽培や飼育に携わる時間を設定する。	・学校だけでなく、家庭でも飼育や植物を育てられるような機会を設け、興味・関心を高めていく。 ・常時活動で自分たちの育てている動植物の世話ができる環境や時間を設定し、発見したことや考えたことを表現できる場を設けていく。
第４学年	・事象や実験結果を基に、適切に考察することが不得手な児童が多い。 ・観察の着眼点が分からない、実験、観察結果について自分の言葉でまとめられない児童がいる。	・「予想→仮説→検証→まとめ→考察」という思考の流れを学習の中で押さえていく。 ・実験、観察の前に着眼ポイントを全体で確認する。また、観察中に具体的に観察すべき点を伝える。	・考察にこれまでに学習したことなどから導き出した根拠を書くことができるようにする。 ・「葉の大きさ、色、数」など書き方を具体的に示す。 ・定期的にノートをまとめるなど繰り返し確認する。
第５学年	・事象提示や生活体験から問題を見いだし、自ら解決していく学習過程に慣れていない。 ・根拠をもった予想や実験計画の発想など、主体的に学ぶ経験が乏しい。 ・理科で使う用語など、基本的な知識の理解が足りない。	・児童が考えたくなる事象提示を行い、自分がもった疑問を自ら解決していく学習展開をする。 ・予想や実験計画を立てる時間を十分に確保し、条件制御などを小集団で検討させて、実験に臨ませる。 ・基本的な知識は、単元中、何度も繰り返し活用させる。	・植物の発芽・成長、メダカの発生など、児童がいつでもすぐに顕微鏡などを使って観察できるように環境を整備する。 ・児童が事象提示で見いだした問題について、なるべく全て解決できるように単元計画を工夫する。
第６学年	・問題解決の過程をよく理解し主体的に学ぶ児童とそうでない児童に二極化している。 ・結果、考察、結論の区別は付いてきた。しかし、考察では、結果を多面的に見て様々な情報を読み取る力が付いていない。	・問題解決の過程を意識して授業を組み立てていく。 ・考察の仕方を理科室に掲示し、考察の際に確認させる。また、考える視点を与えるような補助発問をする。	・代表の児童が観察・実験を進めるのではなく、全員が実際に活動できるように時間や教材を十分に確保する。 ・児童主体に学習を進める力を伸ばす授業を実践する。

教科名	生活科

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善策	補充的・発展的な学習指導計画
第１学年	・遊びや自然と関わりを通して、様々な活動を取り入れているが、飼育、栽培を継続していったり、友達との活動に広げていったりできるようにしていきたい。 ・人とのかかわりという点で、幼保小の連携を視野に入れ、学習計画を見直していきたい。	・校庭や公園、畑や学校の周りなど身近な場所から学習活動を進めていく。体験的な活動を多く取り入れ、活動後は振り返りを行うことで、自分の成長に気付けるようにする。カード等を用いながら繰り返し活動を行い、十分な時間を確保して活動することで、充実感や達成感を味わえるようにする。 ・自らの経験を生かし、幼稚園・保育園の子にどんなことをしてあげたら喜んでもらえるかを子供たち自身で考え、実践できるようにする。	・前後の単元や他教科とのかかわりを明確にし、年間計画と照らし合わせて学習を進める。
第２学年	・具体的な活動や体験を通して、地域や、自然、もの、身近な人々との関わりながら、学ぶ場を設定していった。 ・児童自らの思いや願いを大切にしながら活動を進めた。今後も児童の気付きを認めたり、広げたり、価値づけたりする声かけを多くする。 ・児童が自己決定できる場を大切にして活動を組んでいく必要がある。	・身近な生活や環境の中から活動への思いを拾い上げ、場やタイミングを捉えて活動へと結び付けていく。 ・「教材との出会い」を大切にし、意欲的に活動に取り組めるようにする。 ・繰り返し活動したり、身近な人とふれあったり、地域や身の回りの材を活用したりすることで、児童が自らの力で課題を解決できるようにする。	・前後の単元や他教科とのかかわりを明確にし、年間計画と照らし合わせて学習を進める。

教科名	音楽科

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善策	補充的・発展的な学習指導計画
第１学年	・歌やリズムを楽しみ、積極的に身体表現に取り組む様子が見られるため，相互交流の活動を多く入れる必要がある。 ・鍵盤ハーモニカは、楽しく取り組めているが、指使いやリズムにおける個人差が目立つため，個別の技術指導や達成度の確認の方法を研究する余地がある。	・身振りや遊びを工夫して、身体表現やリズム表現を多く取り入れ音楽の楽しさを追求する。 ・個人、グループなどの練習、発表を通して一人一人の意欲、技術を高める。個別指導の時間をとる。	・行事等を通し、身体表現を発表する場を多くもち、活動する楽しみを味わわせる計画を立てていく。
第２学年	・鍵盤ハーモニカの練習に意欲的に取り組み、多くの児童が確実な指使いやリズムをとることが出来ている。能力差のある数名の児童の個別の指導を徹底する。 ・一斉指導と個別指導とを一単位時間の中でどう兼ね合わせるかが課題である。	・教科書教材を楽しく学習するために、体を動かしてみたり、遊びを取り入れたりしながら生き生きと表現できるようにする。また児童の興味に合わせて曲を探し、いろいろな楽曲に触れさせる。 ・鍵盤楽器については児童相互の教え合い活動を取り入れることや、個別指導を充実させ、確実な指使いの習得を目指す。	・教科の特性上、家庭で習い事をしている児童とそうでない児童の差が大きく開いてしまう。進んでいる児童にはより難しい課題曲やパートを与え、基礎的な段階にいる児童には簡単なリズムや運指でできるパートを与えるなど、どのレベルの児童も一緒に音楽を楽しめるように工夫する。
第３学年	・基礎基本の定着と音楽を表現する楽しみを感じながら演奏する。 ・リコーダーは基本の指押さえとタンギングの指導を徹底する。 ・歌では響きのある声で歌うように指導しているが、教師から声かけをしないと徹底できない。	・音程や休符の長さ、リズムの学習を繰り返す。 ・リコーダーの指導では、タンギングや息の量に気を付けるよう指導する。 ・歌う前に気を付けることを考え発表させる。	・リコーダーのソラシを使って、音とリズムで音楽づくりをする。 ・主体的に音楽表現を工夫する活動を通して、音楽に対する関心をもつ。
第４学年	・クラスでの取り組みもあり、リコーダーが好きな児童も多い。一方で能力の差もある。 ・歌唱は、大人数でまとまった合唱をすることができる。しかし大人数に埋もれている児童もいる。	・タンギング・息のバランスなど、技術的なことを押さえながら、一人一人の音を聴く時間も設けて個に添ったアドバイスをする。 ・アンサンブル活動を取り入れ、少人数で歌う楽しさや声が重なる美しさを感じさせる。	・自分の音と周りの音をどちらも聴きながらアンサンブルができるような意識を常にもてるように指導していく。 ・少人数や個で歌う場面を増やして児童同士で課題やよさを見付けながら高め合う活動を取り入れる。
第５学年	・歌は自然な発声で高音を頭声発声ができつつあるが、変声期や地声で歌う児童もまだいる。 ・リコーダーで演奏することが好きな児童も多いので、曲想や表現といったことも指導していく。	・歌詞について感じ取る時間を作ること、音楽を表現することの楽しさや喜びを感じられるような働きかけ、取り組みをする。 ・周囲の音を聴いたり手本を聴いたりして、表現に対する意識を高める活動を取り入れる。	・音色をよく響かせるために必要な息のバランスをいつも考えながら吹いて美しい音色の定着をはかる。 ・児童同士の関わり合いの中で技術的な歌声や発声方法とともに表現が結び付くことの必要性に気付かせる。
第６学年	・リコーダーや器楽の演奏で力を発揮する児童も多い。一方で、フレーズや音楽を感じとった豊かな表現の力や積極性を伴った演奏に欠ける児童もいる。 ・歌唱は響きのある声で美しく歌うことはできるが、周囲を気にしながら歌う児童もおり、本気で歌うことに欠けることが多い。	・音楽の演奏や表現をすることを楽しめる活動や喜び感じられるような取り組みを取り入れながら高学年としての表現を感じとらせる。 ・音楽要素や表現記号について指導するとともに、息の流れにのった音楽表現を目指す。	・アンサンブルをしたり全体で合奏をする機会を多く設けたりして、演奏することの楽しさを味わわせる。 ・合唱や重唱に取り組み、声の響き合いの美しさを感じ取らせて歌う楽しさを味わわせる。

教科名	図画工作科

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善策	補充的・発展的な学習指導計画
第１学年	・楽しく活動できている。アイディアが浮かぶのに時間がかかる児童がいる。 ・全体指導の中で、個人の指導をどのように効率よく進めていくか。基本的な技能の個人差に対応するための、授業内での工夫が必要である。	・授業の流れを言葉や絵で板書することにより、どの児童も活動内容が理解できるようにする。 ・材料や道具の準備を工夫し、個々に応じた活動ができるようにする。	・鑑賞の時間をできるだけもち、お互いの作品のよいところを認め合うことを奨励していく。
第２学年	・素材、道具、活動事態が新鮮で、楽しく活動できているが、楽しいだけに終わらず、過程でそれぞれが気付いたこと、試行錯誤、友達とのかかわりなどを、ていねいに押さえていく必要がある。	・一人一人の進行状況とつぶやきを見取りながら、よい思いつきを評価し、自信をもってどんどん制作できるようにする。 ・終わったらやる課題を分かりやすく提示し、授業の基本の流れを定着させる。	・途中でお互いの作品を鑑賞したり、ピックアップで紹介したりして、認め合う環境を作る。 ・ふりかえり、感想、発表を行い、達成感を味わわせる。
第３学年	・楽しく課題に取り組めている。きまりや流れの理解、他者との関係でのマナーなど、基礎を確認している段階。	・一人一人の思いを十分に聞き取り評価し、意欲につなげる。のびのびと表現する中で、自分らしい表現の大切さに気付くよう、声をかける。 ・図工の時間の約束など、一つ一つ確認していく。	・作品のよさを考えたり認めたりできるよう鑑賞の時間を設ける。造形遊び等を通して、よく考えて楽しく学ぶ姿勢を育てる。
第４学年	制作に対する興味と意欲は高い。きまりやめあてを意識し、取り組めている。めあてをクリアする、という意識にとどまらず、自分自身の探求へと深めていきたい。	・一人一人の思いを十分にききとり評価し、自信を持たせる。毎時間めあてを明確にし、遅れがちな児童への個別の支援を行っていく。道具や材料について、正しい扱いを提示して、定着させる。	お互いの作品を鑑賞できる発表の機会を設ける。学び合いの機会を設け、イメージを共有して制作する雰囲気を持てるようにする。
第５学年	・制作に対する興味と意欲は高いが、きまりに対する意識が薄く、友達との関わりや相性で、互いの作品を尊重する意識が薄い。 ・困難を感じるとあきらめてしまう児童もいる。	・一人一人の思いを十分に聞き取って評価し、自信をもたせる。 ・自分の作品が認められ、他者の作品のよいところも認めることができるようになることを重点的な目標とする。	・自分や他の人のよさを確かめられる場を設ける。 ・それぞれの感じ方、表し方が違うことのおもしろさに気付ける鑑賞の設定を目指す。
第６学年	・制作への意欲は高く、集中してじっくり取り組める子が多い。今後、自立的に制作を進めていかれるよう、自分で選択し計画的に進めていける課題が必要である。	・道具や材料は、きまりを確認し安全に使えるようにする。自己管理できる流れをつくる。 ・制作過程の試行錯誤を十分評価し、失敗に意味があることに気付けるようにする。	・自分や他の人のよさを確かめられる場を設ける。 ・それぞれの感じ方、表し方が違うことのおもしろさに気付ける鑑賞の設定を目指す。

教科名	家庭科

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善策	補充的・発展的な学習指導計画
第５学年	・学習活動に積極的に取り組み、協力して学習を進めることができる。生活経験や個人の能力に違いがあるため、作業時間に大きな差が生まれる。 ・裁縫、調理ともに、日常での生活経験が少なく、どの実習においても丁寧に時間をかけて指導する必要がある。	・経験や能力の違いを活かして学び合える学習課題の設定、展開を工夫して指導する。 ・グループでの学び合いを大切にし、個の能力を伸ばす指導を行う。	・学習した内容を日常生活に生かすために、家庭学習を推奨し、家庭との連携を図る。 ・全員の到達点を明確にもち、発展教材を準備することによって、早く終えた児童に新しいめあてをもたせ、終わらない児童への指導時間を確保する。
第６学年	・衣食住それぞれの生活への興味・関心は高い。学習道具の忘れ物が多く、指導に支障を来すことが課題である。 ・学習活動には手順よく取り組め、協力的な姿勢で班活動にも取り組んでいる。 ・技能面では、裁縫や調理など生活経験や個人の能力による差が見られる。	・学習態度を見直し、自主的に学習に必要な道具を確認したり、準備したりできるよう指導する。 ・家庭との連携を図りながら、日常生活においても、バランスのよい食生活が送れるよう実践化を意識した指導を行う。 ・グループでの学び合いを大切にし、個の能力を伸ばす指導を行う。	・グループとして協力して学習する場面、個の能力を伸ばす場面、それぞれに応じたねらいに沿って指導の計画・実践を行う。 ・個々に対応できるよう、保護者の協力を得る、個別対応の時間を確保するなど、指導計画の工夫、実践を行う。

教科名	体育科

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善策	補充的・発展的な学習指導計画
第１学年	・活動自体は楽しめているが、めあてをもって臨んでいる児童が少ないため，めあてをもたせたり振り返りをさせたりする時間を確保する。 ・また、ゲームや遊びの勝敗に対する基礎的な態度を繰り返し指導する。	・めあてを例示し、自分に合っためあてを選べるよう支援していく。 ・互いの違い、よさを意識し、尊重し合えるような声かけを、重点的かつ継続的に行う。	・児童一人一人がめあてをもって体育の学習に取り組めるよう、学習カードを工夫し活用する。 ・安全にゲームをしたり、ゲームを通して友達を思いやったりする姿勢を育てる。
第２学年	・すすんで体を動かし、楽しんで運動することはできるが、簡単な決まりを守れなかったり、仲良くできなかったりする場面がある。 ・負けを素直に認められない場合があるので、基礎的な態度を繰り返し指導する。	・児童一人一人がめあてをもって体育の学習の取り組めるよう、導入の段階で学習のめあてや、約束をしっかり伝えていく。 ・基本的な運動ができるように、アドバイスの声かけや補助を的確にできるようにする。	・友達を応援し、優しく教えてあげられたり、約束を守って運動したりできるように配慮する。 ・ウォーキング、縄跳びなど、一人一人の体力向上のための支援をしていく。
第３学年	・ルールを守りすすんで運動には取り組んでいるが、互いのよさを認め合う姿勢が不十分であるため、振り返りの場をとる必要を感じる。	・児童一人一人がめあてをもって体育の学習の取り組めるよう学習カードを工夫し、活動する。 ・互いのよさを認められるような場を作り、運動に対する態度面での向上を図る。	・カードを使った学習をし、個々が自らの課題に即した運動ができるようにする。 ・学習の終わりに互いのよさを認め合う振り返りの場を設ける。
第４学年	・楽しく体を動かし、進んで課題に取り組む児童が多い。 ・集団でのルールを守ったり、互いのよさを認め合ったりする態度が十分ではない。 ・協力して取り組む課題を設けていく。	・みんなで楽しむためのルールを児童たちで考えられるようにする。 ・互いのよさを認められるような場作りをし、運動に対する態度面での向上を図る。	・クラス遊びを休み時間に設定する。運動があまり好きではない児童も体を動かせるように、体力作りにつなげていく。
第５学年	・活動には真面目に取り組むが、自分のめあてを決めて取り組んでいる児童は少ない。	・児童一人一人がめあてをもって体育の学習に取り組めるよう学習カードを工夫し、活用する。ペアやグループでの学習を取り入れることで学び合う活動を設定する。	・学習カードを活用し、個々が自らのめあてに取り組めるようにする。また、必要な個別の指導・助言を伝える。
第６学年	・運動の特性を捉えたり自分の身体能力を判断したりできず、自己の能力に適しためあてをもって運動に取り組みにくい児童がいる。 ・運動習慣の二極化傾向や体力の低下傾向が進み、技能面の積み重ねができていないため、運動の特性を生かし技能を高める楽しさを味わう段階まで指導計画を立てることが難しい。	・単元の導入でオリエンテーションを行い、運動の特性を知ることに加え、具体的な数値目標やめあてを捉える活動を設定する。 ・運動の基礎的な技能や知識を身に付けられるよう、運動の素地を身に付ける活動を単元計画や学習過程に計画的に設定する。 ・ペアやグループでの話合い活動を取り入れて、児童相互で運動技能を高めるポイントを助言し合うようにする。	・学習カードを活用し、めあてを達成するために必要な個別の指導、助言を伝える。 ・児童の実態に応じてゲームのルールなどを工夫、吟味することで、運動技能の差がありながらも、児童全員が自分のめあてをもち、運動本来の楽しさを味わえるようにする。 ・運動技能を高めるための声かけ集を作り、場面や相手に応じて、モデルを参考にしながら児童が互いに声をかけ合い学び合う経験ができるようにする。

教科名	外国語

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善策	補充的・発展的な学習指導計画
第５学年	・どの児童も学習活動に積極的に取り組み、意欲的に活動をしているが、現在使っている教材の内容は、中学年での学習内容や経験値に比べてやや量が多い。実態に即してカリキュラムや教材を修正していく必要がある。 ・授業の形式に慣れるに従って、コミュニケーションが活発に行われ、学びが主体的・対話的になってきている。これを継続させながら、深い学びになるようにする。	・語彙やフレーズを絞り込み、児童が覚えやすくすると同時に、フラッシュカードなどを多用して、わかりやすく楽しい授業を展開する。 ・授業の中でゆっくりとはっきり話すことを教師も児童も心がけることにより、どの児童も語彙やフレーズに親しみながら自信をもって参加できるようにしていく。 ・児童の実態に応じてカリキュラムや授業をさらに工夫していく。	・フラッシュカードなどの教材には補充的な内容も入れ、語彙やフレーズを想起しやすくしていく。 ・学習した内容を日常生活に生かすために、日常的な授業の中で単語やフレーズを担任が使うようにする。 ・主に国語の学習内容と関連付けながら、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を伸ばしていく。
第６学年	・移行期のカリキュラム上、中学年の素地が少ないため、現在使っている教材は内容がやや高度である。 ・できるだけ日本語を使わない形式の授業を進めているが、指導者側も児童側もまだ慣れていない部分がある。 ・ALT との連携では日本語で相談ができないため、その場での判断になる場面がある。	・ゲームやチャンツを多く取り入れたり、視覚的な教材を多く自作したりしているが、楽しく活動できるようにさらに工夫していく必要がある。 ・ICT を活用した授業では、教材コンテンツの発音が聞き取りにくい場合があるので、ゆっくりと発音を繰り返し、理解ができるようにしている。 ・児童の実態に即しながら、目標を精選してく必要がある。 ・授業者が英語についての力を高めるようにしていきたい。	・学習した内容を日常生活に生かすために、日常的な授業の中で単語やフレーズを担任が使うようにする。 ・総合的な学習の時間や他教科の内容との関連を図り、外国語の背景にある文化に対する理解を深める。 ・特別活動との関連を積極的に図り、他者に配慮してコミュニケーションを行う態度を養っていく。